

日本中世英語英文学会東支部 第33回 研究発表会 プログラム

- 開催日 2017年(平成29年)6月17日(土)
■ 会場 金沢学院大学
〒920-1392 石川県金沢市末町10
開催校連絡先 TEL 076-229-8928 (工藤義信研究室)

- 受付 [12:30-15:30] 2号館5階251講義室前
- 開会式および東支部総会 [13:30-14:00] 250講義室 (司会) 東北公益文科大学 狩野 晃一
[開会式] 日本中世英語英文学会会長挨拶 岡山理科大学 地村 彰之
開催校挨拶 金沢学院大学学長 秋山 稔
日本中世英語英文学会事務局長挨拶 広島大学 大野 英志
[東支部総会] 事務局報告他 東京未来大学 宅間 雅哉
会計報告 駒澤大学 福田 一貴
会計監査報告 大東文化大学 長谷川 千春
開催校案内 金沢学院大学 工藤 義信
- 研究発表 [14:10-17:20] 250講義室
1. [14:10-14:50] (司会) 慶應義塾大学 井口 篤
Ember Days in the *Temporale* in William Caxton's *Golden Legend*: A Perspective of Secular Medicine
..... 慶應義塾大学非常勤講師 Wanchen Tai
2. [14:55-15:35] (司会) 信州大学 伊藤 盡
息子を孕む「泉の貴婦人」: フェロー語バラッドとスコットランド聖人伝
..... 尚美学園大学 林 邦彦
(休憩 [15:35-15:55])
3. [15:55-16:35] (司会) 白鷗大学 新川 清治
Hatton 116 写本の言語について
..... 東京理科大学 市川 誠
4. [16:40-17:20] (司会) 慶應義塾大学 徳永 聡子
16世紀の final -e: Wynkyn de Worde のスペリング
..... 慶應義塾大学名誉教授 池上 昌
- 閉会の辞 [17:20-17:30] 250講義室 金沢学院大学 工藤 義信
- 懇親会会場貸切バス発 [17:50] 2号館前 (金沢駅へ向かう方もご利用ください)
- 懇親会 [19:00-20:30] 会場: ANA クラウンプラザホテル金沢 3階「鳳」

■ 注意事項

- 会場への交通および建物の配置については、同封の案内図をご覧ください。
- 受付は、2号館5階251講義室前です。
- 支部会費(一般2,000円、非常勤講師、退職者、学生・大学院生1,000円)の納入につきましては、受付でご確認ください。会費未納の方は、受付で申し受けます。当日のみ参加の方は、当日会員会費として500円を申し受けます。
- 会員、発表者、司会者の控室は、2号館5階252講義室です。
- 大学の教室運営の関係上、会場および控室の開場は12時30分頃の予定です。何とぞご理解のほどお願いいたします。
- 会場は飲食可ではありますが、キャンパス内の食堂・売店は営業しておりませんので、昼食を済ませてご来場ください。
- 喫煙は館内の所定の場所をお願いいたします。
- 懇親会費(学生・大学院生3,000円、それ以外の方は6,000円)は、当日受付でお納めください。
- 乗用車での来場はご遠慮ください。

日本中世英語英文学会東支部 [事務局]

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12 東京未来大学 宅間雅哉研究室内

Tel: (代) 03-5813-2525、(直通) 03-5813-2540 内線1414

< 研究発表要旨 >

研究発表 1 Ember Days in the *Temporale* in William Caxton's *Golden Legend*: A Perspective of Secular Medicine

Wanchen Tai (慶應義塾大学非常勤講師)

司会 井口 篤 (慶應義塾大学)

The *Golden Legend* (hereafter *GL*), William Caxton's 1483 English translation of *Legenda aurea*, serves as a source for English sermons in the late medieval period and has a prominent presence in shaping the religious knowledge of the common people. In the *Temporale* section of the *GL*, the chapter of Ember days regarding the four times of fasting during the year explains the reasons for this form of abstinence. Unlike the orthodox emphasis on spiritual health and the path to salvation, which is synonymous with fasting in the religious context, the narrative of Ember days instead has its focus on physiology. The explication of the physiological functions of fasting suggests the ways the humours change from season to season and the ways their balance should be kept through fasting. The practice of Ember days is generally argued to have its origins in agricultural festivities in ancient Rome; therefore, its physiological concern is not entirely novel. Nevertheless, its stress on secular medicine can hardly be deemed familiar to the Christian discourse on fasting. Sermons on Lent and gluttony are largely sites in which spiritual functions of fasting are delineated in conventional terms. Not many sermons on Ember days have survived in Middle English, but they all seem to have employed the same rhetoric. Like narratives about fasting, a defining character of most legends of female saints, fasting on Ember days also adheres to the same principles of controlling one's physical desires and disciplining the body. Deviating from the conventional plot of fasting stories, however, the fasting on Ember days targets a different kind of body, speaks to another concern and appeals to a new audience. The demographic changes resulting from the Black Death in the fourteenth century also brought about a restructuring of the economy. With this new prosperity, people outside the privileged class could afford a novel view of food and diet. With secular morals slackened and the public observance of fasting relaxed during this economic growth, the point of secular medicine might have unveiled a side view of communication between the church and its audience through sermons, that is, communication about a new form of bodily control. This paper seeks to understand the ways the secular element situates itself in sacred contexts, how attention oscillates between the necessity of fasting and the need for dieting, and the means through which the shift from the wellbeing of the soul to the health of the body are more significant than general advice.

研究発表 2 息子を孕む「泉の貴婦人」：フェロー語バラッドとスコットランド聖人伝

林 邦彦 (尚美学園大学)

司会 伊藤 盡 (信州大学)

今日、フェロー諸島、およびデンマークの一部の地域で使用されているフェロー語によって今日まで伝承されている数多くのバラッドの中には、様々なジャンルのアイスランド・サガ作品と題材を同じくする作品がいくつも含まれているが、それらのバラッドの中に、*Ívint Herintsson* と呼ばれる、アーサー王物語等に題材を取ったと考えられる作品がある。この作品は 18 世紀後半から 19 世紀半ばにかけて、一般に A、B、C と呼ばれる三つのヴァージョン

が採録されているが、いずれのヴァージョンも複数のバラッドからなるバラッド・サイクルで、作品の大筋は三ヴァージョン間で共通している。

13世紀のノルウェーでは主としてホーコン4世（在位1217-63）の治世下で多くのフランス語宮廷文学がノルウェー語に翻案され、それら作品の中にはその後さらにアイスランドで翻案がなされたものも多く（こうした作品は「騎士のサガ」と総称される）、その中にはアーサー王伝説に題材を取った Chrétien de Troyes の作品群も含まれており、フェロー語バラッド *Ívint Herintsson* を扱った先行研究では、こうしたアーサー王伝説に題材を取った騎士のサガ作品との間で共通するモチーフの存在が何点か指摘されてきた。

しかし、過去の研究では、本作品の主要登場人物の人物像や登場人物間の人間関係についての分析、およびそれらについての他言語圏のアーサー王文学との比較などは行われておらず、そこで本発表ではバラッド・サイクル *Ívint Herintsson* の中で、特にアーサー王物語の痕跡が多く見られるサイクル後半部における、本作の主人公 *Ívint* (Chrétien 作品の *Yvain* の主人公 *Yvain* の対応人物と考えられる) と、*Ívint* が作中で深い関わりを持つ相手であり、いわゆる「泉の貴婦人」の人物像の痕跡が窺える、ある未亡人の言動およびその作中における歩みに焦点を当て、本作とのモチーフの共通が指摘された騎士のサガ作品やその原典とされる Chrétien 作品における対応人物のケースと比較し、各々の特徴を明らかにしたい。その上で、フェロー語作品における *Ívint* と未亡人の言動や作中の歩みに関し、騎士のサガ作品や Chrétien 作品とは異なり、*Ívint* が未亡人に息子を孕ませる点などについてフェロー語作品と共通性が見られるスコットランドの聖人伝 *Vita Kentigerni* の一ヴァージョン（12世紀の作とされる）に記された *Kentigern* の両親を巡るエピソードの内容と比較し、本聖人伝の内容とフェロー語バラッド *Ívint Herintsson* の物語との関係の有無を探りたい。

研究発表3 Hatton 116 写本の言語について

市川 誠（東京理科大学）

司会 新川 清治（白鷗大学）

13世紀前半に Tremulous Hand が書き写した *St. Bede's Lament* で描かれているように、ウィリアム1世によるノルマン征服後、イングランドでは高位聖職者のほとんどが外国人となり、修道院や教会などで英語が使われることが少なくなった。この状況にもかかわらず、Ælfric や Wulfstan などの古英語の作品は12世紀以降も書き写され続けた。Kerによれば西暦1200年以降に製作された英語写本は27現存する。Warnerによる Cotton Vespasian D xiv 写本の刊行本、Irvineによる Bodley 343 写本の刊行本、そして *the Peterborough Chronicle* の言語から分かるように、12世紀の写本の言語の特徴として綴りの多様性を挙げることができる。それでは、12世紀の写本の一つであり St. Chad 伝が収録されていることで有名な Oxford, Bodleian Library, Hatton 116 写本にはどのような言語変異が観察されるのだろうか？

Hatton 116 写本は、12世紀前半に製作された写本であり、St. Chad 伝だけでなく Ælfric の Catholic Homilies First Series, *Hexameron*, *Interrogationes Sigeuulfi in Genesin*, *De Falsis Diis* などが収録されている。Tremulous Hand による注解の存在はこの写本の Worcester とのつながりを示唆する。Hatton 116 写本の言語についての先行研究として Vleeskruyer (1953) がある。Vleeskruyer の写本の言語についての関心は、主に St. Chad 伝の言語に向けられており、それ以外の作品の言語について「主にウエストサクソンの標準に従っている」と述べている。確かに、写本の言語を読むと、主に後期ウエストサクソン方言で書かれている。しかし、Hatton 116 写本の言語を Clemoes や Pope による Ælfric の刊行本のそれと比較すると、

Vleeskruyer が触れていない言語変異がいくつか観察される。また、写本内の異なる作品の言語を比較すると、1 人の写字生によって書き写されたにもかかわらず、作品間にも言語の違いが見られる (例として *seolf* と *sylf* が挙げられる)。

本発表では、旧中世イギリス研究資料センター所蔵のファクシミリ本からの発表者自身の転写テキストに基づいて、Hatton 116 写本の言語の特徴について報告する。そして、既存の刊行本との比較から、Hatton 116 の言語特徴、特に製作から 1 世紀経た *Ælfric* のコピーの言語の特徴に焦点を当てる。

研究発表 4 16 世紀の final -e: Wynkyn de Worde のスペリング

池上 昌 (慶應義塾大学名誉教授)

司会 徳永 聡子 (慶應義塾大学)

中英語の final -e (語末の /ə/) は 14 世紀末には日常の会話では発音されなくなった。そうするとスペリングに <-e> を付けた語が大幅に増えた。その <-e> の使われ方は、まるで無造作で恣意的であるように見える。しかし、何か法則があるにちがいない。ロンドンの印刷出版業者 Wynkyn de Worde が出版した *Ipomydon* での用例を報告する。

中英語の韻文ロマンス *Ipomydon* は 2346 行からなる作品で、London, British Library 写本 Harley 2252、ff. 54-84 に収められている。de Worde はこの Harley 写本にある *Ipomydon* (以下 H と略す) を底本(exemplar)として使って(Meale, 1982)、この物語を出版した。二編の断片が現存している。一つは British Library, Bagford Ballads, Vol. i, No. 18 の一葉 (STC, No. 5732.5)、もう一つは New York, Pierpont Morgan Library 20896 の 38 葉 (STC, No. 5733)である (以下、前者を BL, 後者を PML と略す)。BL は全部で 56 行、底本 H の ll. 261-288、ll. 293-320 に対応する。PML は H の 193 行目から最後の 2346 行までに対応する 2028 行からなる。STC はこの二編の印刷本の出版を、BL が 1522 年頃、PML は 1527 年頃としてきたが、近年出版順は PML が先とする見解が出ている(Sánchez-Martí, 2005)。どちらが先にしても、BL, PML は H には無い特異な読みを数か所で共有しているので、後発本は先発本を copy text としているのは間違いない。

Wynkyn de Worde 工房は *Ipomydon* を出版するにあたって、底本 H を精力的に修正した。意味が分かりやすくなるように本文を書き直す。脚韻は見た目が良くなるように工夫する。スペリングの統一も目標の一つで、語末の <-e> の扱いもこの流れの中にあっただろう。BL, PML は <-e> をどのように修正したか。H の <-e> と比べてどこがどう違うか。三つのテキストを比較対照できるのは BL が生き残った 56 行分にすぎないが、ここでの <-e> の使い方は、テキスト全体に結構当てはまる。

今回は、short vowel + double consonants + <e> の用例を中心に発表する。使用したテキストは、Tadahiro Ikegami ed., *The Lyfe of Ipomydon*, Vol. I (1983), Vol. II (1985), Tokyo: Seijo Univ. である。

H の short vowel + double consonants + <e> は BL/PML で次のように現れる。各組の語の前に挙げた形が H の形、BL/PML の形を > 印の後に挙げた。*印を付した語のスペリングについては、後段で述べる。

-lle > -ll: alle (pron. pl.) 265 > all; dwelle (inf.) 271, 277, 293, 297 > dwell; halle (n.) 266, 304 > hall; mantille (n.) 'mantle' 317 > mantell; smalle (adj. pl.) 303 > small; welle (adv.) 264, *wele (adv.) 280, 282 > well; wille (n.) 270, 297 > wyll; ylle (adj. sg.) > yll.

-ppe > **-p**: cuppe (n.) ‘cup’ 295 > cup.

-tte > **-t**: sette (p. sg.) : grette (p. sg.) ‘greeted’ 267/68 > set : BL gret, PML *grete.

ここで見ると、double consonants の後の<-e>は無くなり、double consonants 自体も、残ったのは-ll で、他の-pp は-p に、-tt は-t に単純化されている。語末の-ll は de Worde 工房好みのスペリングの一つに挙げられているもので (Aronoff, 1989)、ここでの用例もそのことをよく表している。-pp > -p の cuppe > cup は PML 325 行にもう一度現われ、同様に cup と書かれている。しかし、-tt > -t に示したライムし合う二つの語 sette : grette > set : BL gret, PML *grete はテキストを先に進むと、PML に伝統のスペリング sette, grette が復活する。sette は set と並んで用いられるが (e.g. sette (p.pple.) 542 /set (p.pple.) 800; sette (p. sg.) 903 / set (p. sg.) 815)、grette (p. sg.) は gret と交代することなく常にこの形で現れる (e.g. 868, 904 etc.)。

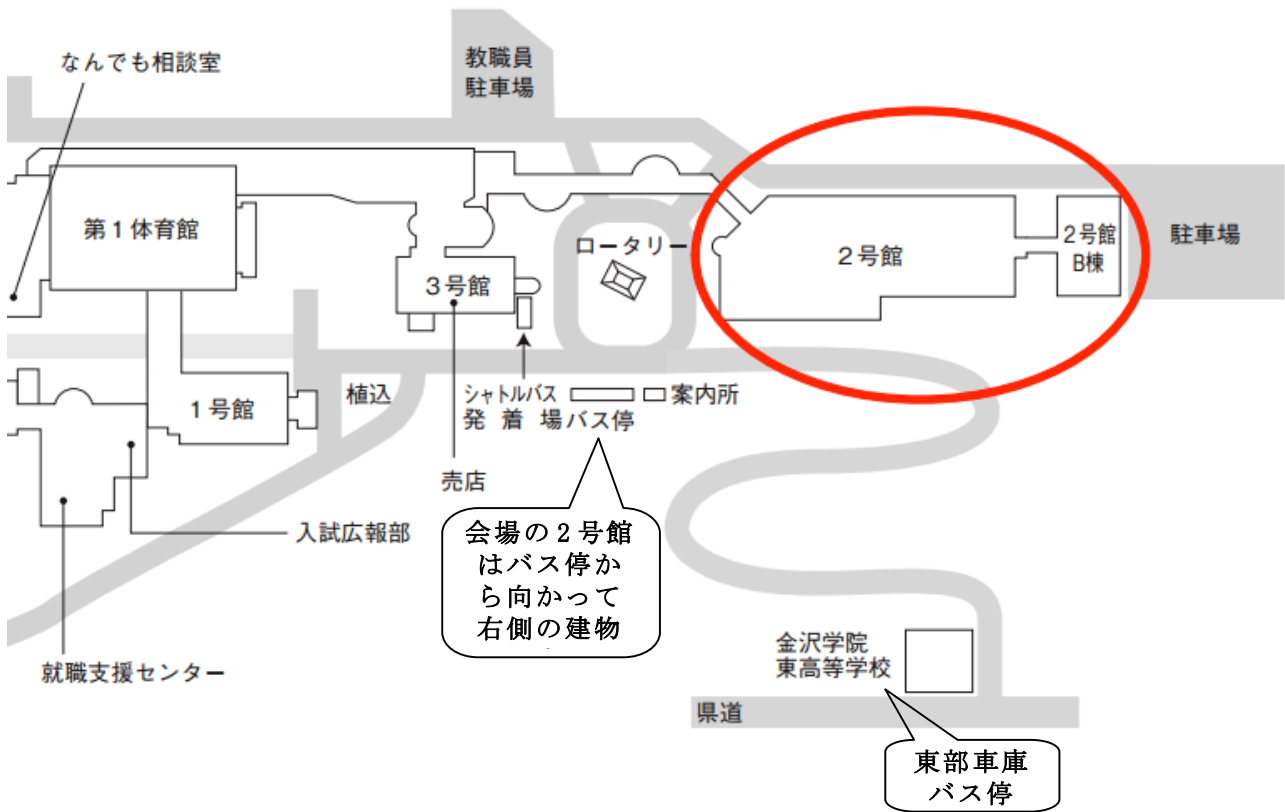
以上の用法から見えるのは、de Worde の規則は、短母音の後には子音字は一つ、あるいは double consonants + <-e> と綴る。ただし double consonants が ll の場合は<-e>なしというものらしいことである。

*印の語、H の wele (adv.) ‘well’ 280, 282 と set (p. sg.) とのライムに使われた PML の grete (p. sg.) ‘greeted’ 268 だが、これらの語の綴りは vowel + single consonant + <e> である。この並びは de Worde の修正では、前の母音が長母音のときに使われる (e.g. **-on** > **-one**: anon (adv.) ‘at once’ 263, 316 > anone)。それに、wele (adv.) の母音は長母音であることは 351、433、454、653、868、1037、1409 での euerydele (n., adv.) ‘everything, entirely’ (everi + dēl <OE dǣl) とのライムで立証できる (cf. OED, well (adv.))。もう一つの PML の grete (p. sg.) は、このライムでは<-e>無し of gret の間違い (cf. 255/56 PML set (p. pple) : gret (p. sg.)) であろうと思うが、H 1400 にも grete (p.sg.) があるので、あるいは長母音が保持された発音もあったのかもしれない (cf. Ekwall, § 266)。

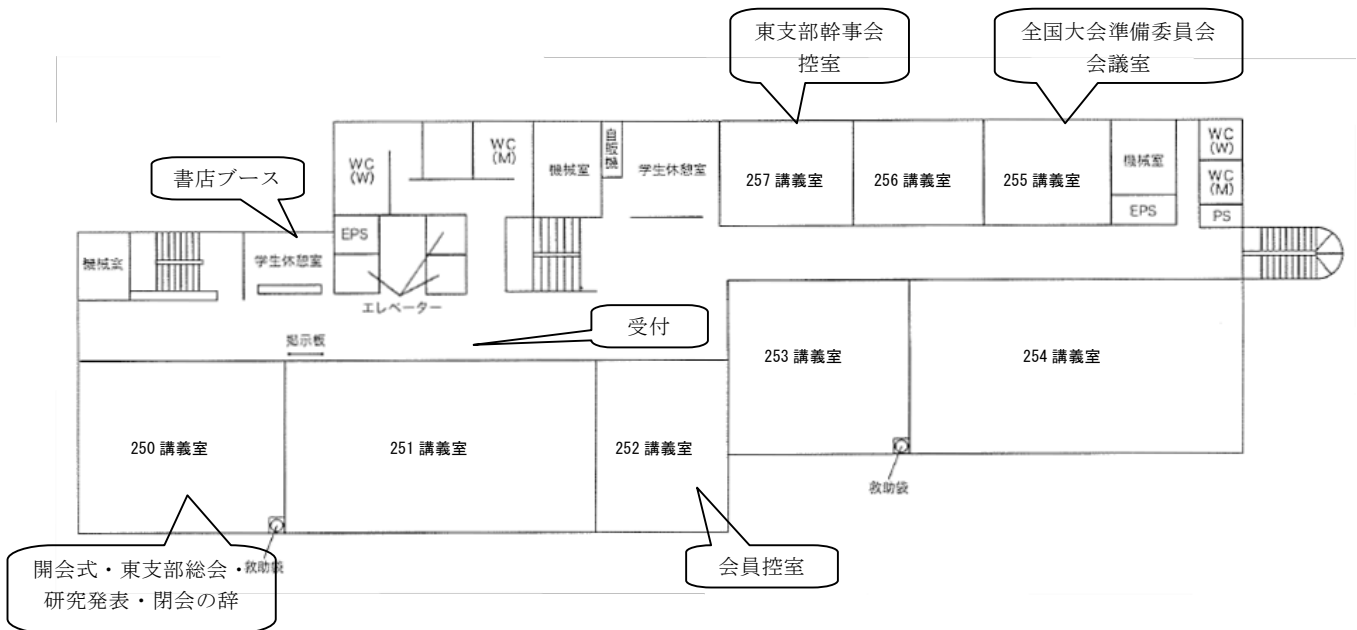
しかし、語末の<-e>が長母音を示す印となるには程遠い。もっとも目を引く修正が、two consonants の後の<e>の付加で、語末に出るほとんどの子音群(-ll 以外)は<-e>付が原則であったのではないかと思われるほどである (e.g. **-ng** > **-nge**: bryng (impv. sg.) 263 > brynge)。

なお、BL と PML で -e の扱いに違いがあるのは上述の gret/grete のほか三つあるが、それらは BL, PML の出版順の議論に影響を与えるような有意性はない。

金沢学院大学キャンパス・マップ



会場見取り図 (2号館5階)



交通アクセス

公共交通機関を利用する場合、JR 金沢駅を起点とした交通経路となります。

■バス [金沢学院大学行き]

出発地	出発時間	到着時間
金沢駅東口 3番のりば	9:13	9:55
金沢駅西口 5番のりば	9:13	10:01
金沢駅東口 7番のりば	9:25	10:03
金沢駅西口 5番のりば	9:52	10:40
金沢駅東口 3番のりば	9:53	10:35
金沢駅東口 7番のりば	10:40	11:18
金沢駅東口 3番のりば	12:13	12:55
金沢駅東口 7番のりば	12:40	13:18
金沢駅西口 5番のりば	13:07	13:55

※週末で本数が限定されていますが、キャンパス内に乗り入れる上記の「金沢学院大学行き」のご利用をお勧めします。本数の多い「東部車庫行き」の終点（金沢学院大学キャンパス・マップ参照）で下車し、徒歩でキャンパスに向かうこともできますが、上り坂で15分程度かかります。

■JR [到着：JR金沢駅]

出発地	所要時間
東京（北陸新幹線）	2時間30分
大阪	2時間40分
名古屋	2時間23分

■高速バス [到着：JR金沢駅]

出発地	所要時間	運行本数
東京・渋谷	7時間15分	1便／日
横浜	9時間38分	1便／日
名古屋	3時間58分	10便／日
大阪	4時間35分	2便／日
仙台	8時間30分	1便／日
新潟	4時間37分	2便／日
高山	2時間15分	4便／日

※詳しくは、北陸鉄道でご確認ください。

■飛行機 [到着：小松空港]

出発地	所要時間	運航本数
東京	65分	10便／日
札幌	90分	1便／日
仙台	60分	2便／日
福岡	75分	4便／日
那覇	2時間15分	1便／日

※小松空港よりJR金沢駅行きの連絡バスが運行しています。(約55分)